

ふるさと 散策

女鳥羽川の辺

東京外国語大学助教授

中嶋 嶺雄

(松本市出身・東京都板橋区在住)



女鳥羽川の中ノ橋のたもとには、繩手通り側に柳の老木があつて、枝もたわわに川面に突きだし、春の芽ぶきときには、枝を透かして見える北アルプスの銀嶺が子供心にもひとときわ鮮やかだった。十年程まえ、アルプスが一望できるところをと考えて、故郷に山莊まがいの家を建てた私は、松本へときどき帰るのだが、あの柳の老樹はどうなったのか、確かめる暇をもたない。

私が生まれ、育ったのは、松本市の中心・中町であつた。町屋風土蔵造りの細長い私の生家は、表通りか



ら裏通りまで貫いていて、女鳥羽川に面したその裏通りを「裏小路」と呼んでいた。川の向うは繩手通りだが、現在の繩手通りのように上品にとりすましたところがなく、中ノ橋の脇にはお好み焼の屋台が美味そうな臭いを漂わせていて、大人になつたら、食べたいだけお好み焼が食べられるんだらうな、などと考えたものである。盛り場の繩手通りにはさまざまな業種の大道香具師が大声をはりあげて客を集めていたが、大人に混つてその円陣に入りこんでは香具師の大言壮語を聞くのが楽しかつた。「裏小路」の大銀杏の樹の下には、子供のアイドル、「一銭店」屋があつた。私の子供の頃は、もう戦中、戦後なので、一銭でなど買えるものはなかつたが、やはりそう呼んでいた。町中に育つた私たちには、冬の鈴市、夏の青山様、それに天神祭や神道祭が素晴らしい子供の世界であつた。私たちの遊び場は、だから「裏小路」であり、女鳥羽川の川原であり、神道(四柱神社)の境内であつて、ときには旧開智小学校や松本城、深志公園へも遠征したものである。

最近、別のところにも書いたのだが、まったくの偶然とはいえ、中町周辺からは、外交や国際関係に関する仕事に携わっている人が何人か出ている。

現在、外務審議官として、アメリカやE.Cと日本の経済関係など、わが国の経済外交の第一線を担っている吉野文六氏(前O.E.C.D大使)とは、最近しばしば御一緒する機会があるが、吉野さんの御父君は弁護士で中町の一丁目と二丁目の境にお宅があつたことを私もおぼえている。二丁目の私の家の二軒おいて右隣のふとん屋さんの御息が「松岡洋右」を著した上智大学教授の三輪公忠氏であり、やはり外交史や国際関係が御専門なので、数年前、子供のとき以来久々にお会いしてからは国際会議などでよく御一緒する。三輪さん宅と私の家のあいだの「裏小路」には吉沢先生という子供好きの歯医者さんがあつたが、同じ松本出身の吉沢清次郎・元駐印大使の御親戚だといふ。一方、私の家の三軒おいて左隣の金物店は国際経済の坂田善三郎・独協大学教授の実家である。それに、中町ではないが、女鳥羽川の北側の土井尻町からは世界的な民族学者で元東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長の岡正雄先生が出ておられる。

いづれも女鳥羽川の辺に育つたのだから、やはり女鳥羽川は世界にながつているといえるのかもしれない。



広報誌『ながのけん』は、県民のみならずと県政のパイプとして、県政のうごきを中心に編集されています。みなさんへの配布は、四月、八月、十一月、一月はすべてのご家庭へ、そのほかの月は市町村、学校、理・美容院、病・医院、職場などへお届けしています。ご愛読ください。

広報誌『ながのけん』の配布

■今月の表紙「信州の民家 雪の宿坊(上水内郡戸隠村)」
百年以上の風雪にも耐えて、寺院建築の面影を今に残す戸隠の宿坊。ことしも、すさまじい豪雪の中で、独特の風格を誇る入り母屋造りの玄關が印象的だ。かつては「戸隠三千坊」といわれたこれらの宿坊も、戦乱の世、維新の世を経て、今では三十数戸。無常な世の移ろいをひとときわ強く感じさせるが、それでも夏冬を問わず、訪れる人々を暖かく迎えてくれるのがなんともうれしい。